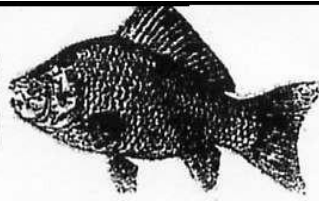


川づくり 清瀬の会



会誌 第22号 2014年 1月発行

発行 宮澤者とよ美 編集者 会誌編集委員会 連絡先 042-491-3616

春迎



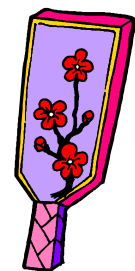
2014



昨年は温かいご支援を賜り心より御礼申し上げます
今年もより一層のご指導賜りますようお願い申し上げます
川づくり・清瀬の会
幹事一同

目 次

柳瀬川・空堀川合流点工事説明会を受けて	宮澤 とよ美	2
清瀬下宿ビオトープ公園	田中 くに子	7
植栽地便り	宮澤 とよ美	8
河川と自然シリーズ⑩ アサギマダラ	宮澤 とよ美	9
清瀬の水事情物語 (3)	小西 一午	10
福島復興応援スタディーツアーに参加して	大谷 恒子	11
野菜作りは豊かな文化のひとつ	佐々木 あつ子	13
自然エネルギー&市民電力 ドイツ・デンマーク視察 (デンマーク編)	小西 美香	15
川と温泉⑤ (みはらしの湯)	木村 芳信	17
2013年度活動記録 (9月~12月)	大谷 郁夫	18
事務局だより	大谷 郁夫	19
編集後記	金内 彰	20



柳瀬川・空堀川合流点工事説明会を受けて

宮澤 とよ美

会員皆様 明けましておめでとうございます。合流点工事という課題を抱えて新年を迎えました。昨年が変わりませず、どうぞ今年もご健康に留意されご協力賜りますようお願い申し上げます。

さて、進行中の柳瀬川・空堀川合流点の工事は、24年3月に水理模型実験がなされ、数ヶ月して実験を元に設計図面が出されました。北々建に問題点を確認、そのとき高額な費用がかかっているため、施工は実験結果重視のご返答でした。

間もなく黒目川が土木学会より最優秀デザイン賞を受賞され、その記念講演会に北朝霞に招かれた九州大学大学院教授島谷氏にお目にかかり、その図面をご覧頂きました。いつもは穏やかな先生ですが、険しいお顔とお声で一言「これはだめ！」

あくる日清瀬市庁舎から島谷先生に対策の電話を入れていただきました。先生は、アドバイザーとして、北々建・東京都・土屋座長に、多自然川づくりの方向性でとお願いをして下さいました。結果がどのようにと気にしているうちに、25年3月までに分流工事部分を残して、新川左岸のみ玉石模様で護岸工事が済み、空堀川(新柳瀬川)とつながりました。その後新護岸は埋め戻され、その様子を誰もが不信に思いながら、以後の設計も提示されないまま工事がストップされました。

25年3月22日、合流点分流口の設計が気になり、説明を求めて北々建西村課長に面談を求めました。その時の様子は会誌20号に報告してありますが、「設計の見直しをしています」のお話だけでした。

平成24年8月西村課長が北々建に赴任され、守屋設計係長となり、当会が是非にとお願いしていた複断面が単断面に。現柳瀬川の左岸の保存が約束され。落差工は生物が移動しやすいように改善。余地には植栽をして河川景観を良くして行きましょう等、これまで否定されていた案件が、担当者皆様により検討され当会の要望の数々が、合意事項として頂くことが出来ました。

その後の設計段階の打ち合わせは、これまでの担当者皆様と、治水と環境・景観を重視した川づくりのための話し合いが継続出来ると思っていました矢先に、西村課長本局へ、担当者皆様も移動され、重要な分流口の詰めが出来ないまま途絶えてしまいました。

25年12月5日に、北々建より「12月12日 合流付近の整備説明会」の通知を頂き、そこで添付図面1枚が資料として出され、映像と口頭にて下記説明がありました。

◆現柳瀬川への分流水量は左岸水際保護のため洪水時、25m³/s 以内 流速：1.8～2 m/s に抑える。

◆工事予定

26年中期：搬入路工事 橋台工事

26年下期～27年：護岸工事

27年中期：橋桁製作架設

27年下期～28年：管理用通路工事と植栽

*工事:雨量 50mm/h 対応 橋長:20m 巾:4m 排水ポンプ車・緊急車両のみ通行とする。

*新しい橋から上流、柳瀬川右岸の管理用通路は簡易舗装工事の上完全通行止め

*新川右岸側の空地は車両通行の邪魔になるので植栽は不可。僅かサツキ等低木植栽

*管理用通路等植栽地以外はインターロッキング舗装

*車両がスムーズに橋を渡るため、植栽地中央に 4m 管理用通路設置

*落差工は生き物に配慮をしたハーフコーン

質疑応答は、清瀬側住民から、橋は作らない予定なのに、何の説明もなくいきなり橋とは? オートバイを含む全車両通行止めとせよなど。

当会としては、何度か北々建に進行状況をうかがいに出向いたのですが、まだ設計中や検討中の返事で話し合いが出来ないまま、今回の説明会となり予測もつかない負の方向への設計変更、早速翌 13 日幹事による検討会に入りました。

これまで当会が要望しても否定された人道橋どころか、緊急車両通行用橋と通路の建設。旧川となる現柳瀬川への分流口は、「右岸の工事を出来るだけ後ろに下げ河床を広げます」と口頭で聞いていたのですが、図面は現在の位置から変わらず、改善して戴きたい現柳瀬川の流入水量、流速を抑えるためのコンクリートブロックの積み重ねや、これまでなかった左岸の法面保護工、そして河床全面への護床ブロック等、施工すれば左岸の護岸保護・河畔林保存の約束は反故にされかねない設計です。

これまで、島谷教授、吉村伸一先生のご指導を頂き、この改修に生かしたい基本方針、1、山付部河畔林は、保全が原則。 2、これまで大きな侵食を受けていない河岸などは護岸を入れないこと(手をつけない)。 3、河岸防御が必要な場合は、捨石で済むのでは。 4、分流堰はコンクリート建造物にするより、分水地点下流側(バイパス)に礫を敷き詰めて瀬のような形にするのが望ましい。礫が流れにくくするには、木杭等打ち込むなどの工夫等の多くのアドバイスを頂き、1、旧柳瀬川への分流口は現在の川幅形態をそのままに。左岸の天然護岸・河畔林の保存。 2、新柳瀬川の河川形態を、複断面から単断面とし河川巾を狭める。 3、旧川となる柳瀬川の環境保全が可能な水量確保等数項目の要望書をかさねて清瀬市と合意の上提出しています。

水理模型実験が行われた後、かなりの月日を経て説明会となり、川づくり・清瀬の会が進めたい、国交省通達の多自然川づくりに沿う改修が実現できますよう、12月17日道路交通課長田村氏、水と緑の環境課長渡辺氏と当会:渋谷市議・正木・木村・加瀬・田中・金内・丸山・戸塚・宮澤と話し合い、再度19日渡辺課長と確認の話し合いを行った上で、12月24日次の要望書を持ち、北々建にお願いに出向きました。

北多摩北部建設事務所工事第二課 御中	川づくり・清瀬の会 宮澤とよ美
平成 25 年 12 月 12 日の柳瀬川・空掘川合流点整備工事説明会を受け、当会は下記のように、これまでの合意形成された事項の確認と要望を致します。	

◆理解できない事項（合意できない事項）

1、四市流域連絡会第5期後期に、新合流点に導線として人道橋の設置要望をイメージの図と共に提出。その際これまで通り「橋は作りません」と否定。この度、何の説明もないまま、静かな住宅街、又、近くに公道があるにもかかわらず、管理用通路に緊急車両通行可能な橋の建設は納得できません。（人道橋なら欲しいのですが）この環境に強固な橋は適応しません。

2、これまでの設計にはない、B-B断面図 法面保護工 は施工しないで下さい。

3、合意事項5の植栽地を分断するような管理通路は認められません。工夫を願います。

◆これまでの合意事項

1、原則として、天然護岸・河畔林の保存・保全

2、通常の流れは、全量現柳瀬川へ。洪水時も応分の増水量を流し河川環境と河川景観を保全する。

3、分流口の構造は自然度のある、素材と形態に工夫をし、柳瀬川回廊として又、清瀬のみどり豊かな自然にあったものとする。

4、（今回整備区間）新川を挟む現柳瀬川右岸を、ゆとり分右側に拡幅、河床巾を広げ、洪水時左岸（天然護岸）の水際を洗掘から守る。

5、新柳瀬川河川工事後、左岸・右岸の余地に、環境にあった樹木を植栽する。
（植栽樹種はすでに申請済み）

6、新川の落差工は生き物の遡上に配慮をしたものとする。

7、26年度旧川となる、現合流点の落差工を生き物が遡上できるよう改修。

◆今後の要望

1、合意事項7項目については、次世代に誇れる河川工事として、現実のものになりますよう重ねてお願い申し上げます。

2、B-B断面は、現在異常なく安定しています。法面保護工 は施工しないで下さい。
（多自然川づくりポイントブックⅢ P93及びP140（Ⅲ）水際を固めないによる。）

3、現柳瀬川への分流口ブロックは他河川（近くでは市の川）に多く使われる自然石（巨石）等に変えるより自然度のあるものに配慮をしてください。

4、旧川となる現柳瀬川に日常全量を流下させるための、新川の堰は柱を立て、調節の出来ます角落とし工として下さい。

5、空堀川本川の落差工構造について、設計の段階から検討会をお持ちください。
（石田橋下流、島谷先生ご指導の落差工に習ってください）

6、新川右岸管理用車両通行のために6m巾の管理通路、左岸同様4m巾にし、高木4から5本の植栽。木陰がつかれるよう工夫をして下さい。

7、植栽予定地内の管理通路は、現柳瀬川岸に寄せてください。

平成25年12月24日

以上

北々建：峰岸課長補佐・牧野設計係長・石山氏 3 名と話し合い、要望のうち 2、は受け入れ取り消していただきましたが、他項目は確たるお返事は頂けず、検討して下さいますようお願いをして帰宅。

この間吉村伸一先生に提案事項に問題はないか、確認のご指導を頂きました。

12 月 27 日、中澤副市長に上記話し合いの結果について、北々建へご同行頂いた渡辺課長とご報告。同席の会員と共に、当会の合流点工事に向けての下記方針、国交省の通達、技術基準に沿う施工の要望をご説明させて頂きました。

◆合流点工事の最大課題（提案された図面の改善しなければならない課題）

- 1、現柳瀬川左岸の現況に手をつけない（水際を固めない）（すでに合意事項）
- 2、現柳瀬川右岸の拡幅、河床を広げ、流速を落とし左岸の洗掘を守る。（すでに合意事項） 右護岸上を固めず、護岸に沿い左岸に見合う樹種を植栽。
- 3、護床ブロックで低水路を固定しない。これまでの流れが造る瀬や淵を生かし、水際に葦等の草本の生育を助け、現在の粗度係数（河川の水が河床や河岸などと触れる際の抵抗量を示した数値）を小さくさせない。（生物移動の連続性を維持）
- 4、分流口は現況のまま広げ、日常の水量は勿論のこと、洪水時も応分の水位を流下、現在の河川環境を維持する。（水速：1.8～2m/s 水量：25 t/s の根拠がない）（時には 80t/s 以上をも流下させて、現在の天然護岸・河畔林が存在します。急激な流量減少は環境破壊に繋がります。又、自然に淵や瀬が出来る工法を）
- 5、バイパス入り口の堰は、礫の敷詰めを。否の場合は角落とし工法とし、どちらへもの流入水量が調節できますようご配慮下さい。

【前後はウオータークッション（一般化しています）工法で】

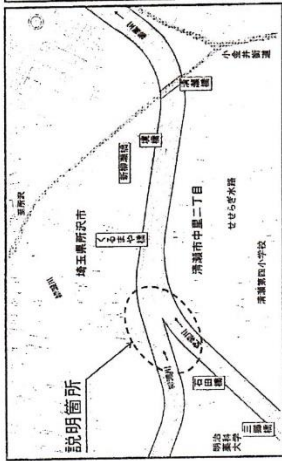
- 6、狭い余地に 4m 巾の管理通路 2 本は困ります。河川に沿う通路を作るのであれば 1.5m～2m とし、緊急車両用通路であっても 2.5m で機能すると思います。ご配慮ください。
- 7、新川及び空堀川落差工は、20 分の 1 勾配で、流芯には落差をつけず低くし、生き物の連続性に配慮をお願いいたします。階段状とはしない。（工法は石田橋下流の落差工ご参照ください）

1 月 5 日（日）中澤副市長現場をご視察、4 名同行。管理棟でしばらく話し合い、今後の予定として、1 月 9 日の幹事会にて要望書を完成、市長懇談会を経て、行政とともに、再度北々建にお問い合わせをして行きたいと思えます。

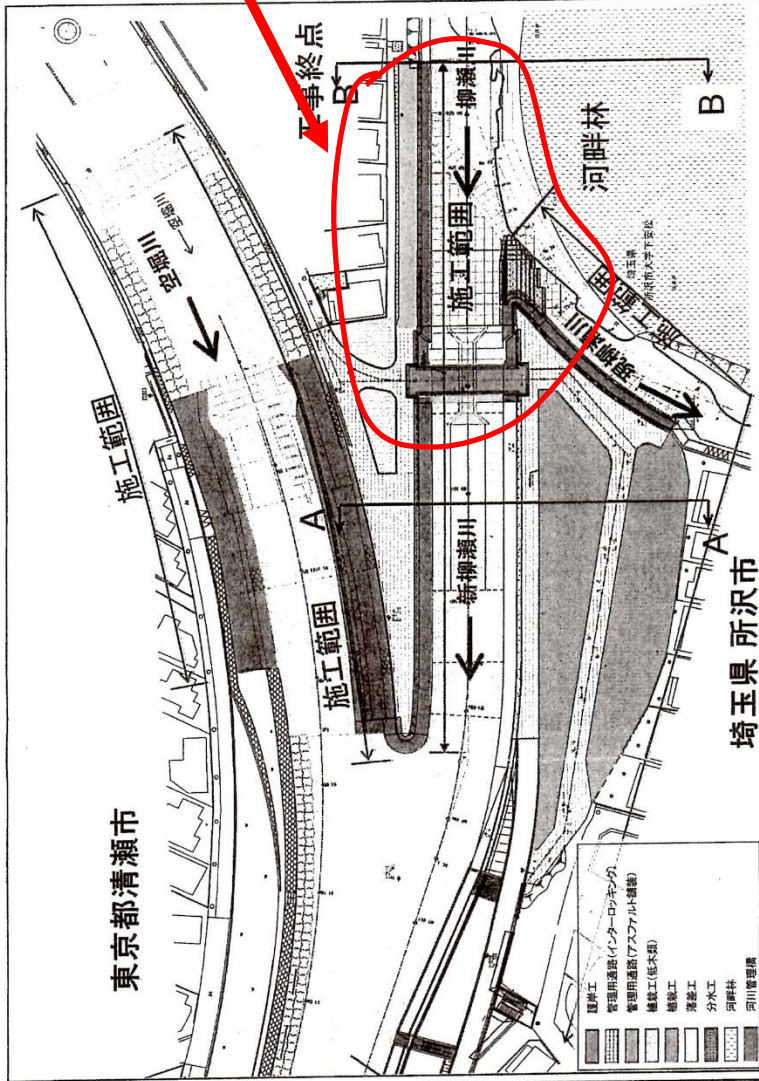
今年も難題が多いと思えます。会員皆様のご協力で乗り越え、合流地点が柳瀬川・空堀川の魅力ある散策の場となりますように、また、次世代に誇り得る河川環境となりますよう頑張って活動をして行きましょう。

柳瀬川・空堀川新合流点付近の整備について

【案内図】



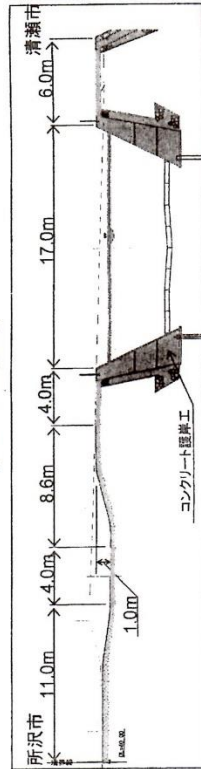
【平面図】



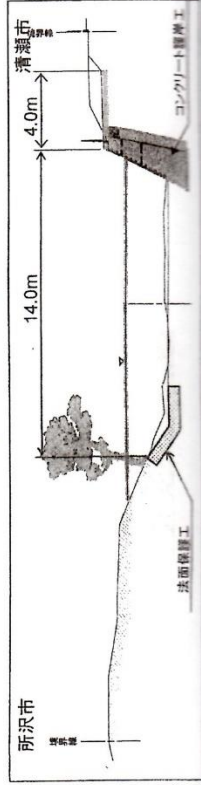
【現柳瀬川の風景】



【A-A断面】



【B-B断面】



見直しを要望する箇所

清瀬下宿ビオトープ公園

田中 くに子

冬枯れのビオトープは、静まり返り鴨のいない池は殺風景、随所に刈り残された芒の穂が縮まって少しの風に揺れている様は淋しさを感じます。

東京都下水道局清瀬水再生センター内に、平成 17 年 3 月オープンした「清瀬下宿ビオトープ公園」があります。この公園を育む会として、平成 17 年 7 月会を立ち上げました。清瀬水再生センター、清瀬市、ボランティアで構成されております。

ビオトープ公園は面積が、4300 m²の中に 500 m²の池があり、池の中の 2 つの小島は小学生が作成した素案の（ブタの鼻）をイメージしたデザインが採用されております。

水源は地下水の汲み上げと水再生センターの処理水をろ過したものが半々入っており、排水は水再生センターを通過して柳瀬川に放流されます。

以前からあった高木 9 本、植栽した小木、蒲以外は何もない裸池から出発しました。

柳瀬川流域の豊かな自然環境を復元するために造られたビオトープ公園ですが、半年が経過するとオオブタクサ、セイダカアワダチソウなどの外来種を含む植物が繁茂し始めました。水再生センター長、市社会教育課、ボランティアの 9 人の会員が園内全体に背丈程に伸びた草刈からの活動となりました。

8 年前以上経過した今、育む会の会員も 14 人となり、外来種の除去等を主にして見守りながらの会の活動。ある時には思わぬ花が咲いてくれ驚かされたりもします。

植栽した木々も成長、環境も整い生態系も豊かで、鳥や昆虫・蛇・蛙なども見られ一年中楽しめるビオトープとなりました。

ただし、川と直結していないので魚だけは以前「川づくり・清瀬の会」の魚類調査の後 50 匹位、子ども達と一緒に放流したのが初めて、今では随分増えました。

清明小学校 4 年生の環境学習も春夏秋冬の年 4 回行っています。センター長さん、係長さんや市の職員の方も参加してくれます。外来種の除去、クズの茎のリース、ザリガニ獲り等も含まれます。ビオトープの作業は年 4 回外来種の除去、水際の草刈、蒲の刈り取り等環境に配慮しながら平日の金曜日に行い、センター職員、市の職員、ボランティアの協働で行っています。シルバーの人達も木の剪定や草刈などしてくれます。



6 月のビオトープ公園

池には蓮田もあり 7 月初旬から 8 月中旬まで花を見る事も出来る。ネムのピンクの花が咲き目を引き、また蒲の穂が出ると何ですかと聞く方がいます。池の蒲が増え過ぎ刈取作業に苦勞もさせられますが、来訪者が多くなり嬉しい限りです。

開園時間 午前 9 時～午後 5 時 ・ 休園 月曜日

植栽地便り (平成 25 年 4 月清瀬市の保存林に指定されました)

宮澤 とよ美

三郷橋の空き地に苗木を植栽して、間もなく 2 年を迎えようとしています。クヌギの一番成長したものは、25 年 10 月の調査で、植栽時 217cm から 342cm に、エノキも 105cm~120cm の苗木が成長のよいものは 210cm です。伸びの悪いものも確実に幹を太らせ、今年の成長が期待されます。

どの 1 本も皆々様の善意でお寄せ頂いた苗木、大事に見つめております。その他にも、野鳥や風によって種子が持ち込まれるのでしょうか、多種類の幼木が芽生え、特にナンキンハゼはことのほか成長が早く 2m はとうに超え、枝を張っています。幼木で一番多いのが桑です。桑も又成長が早く、少し目を離すと植栽木を超えてしまい、鎌では切れず、管理作業時に伐採していただいています。

林床の草本も、新たにヒガンバナ・メドハギ・トキンソウなどが加わり、一年を通して 81 種が観察されます。元々この地は何処からかの客土で盛り土されていますのでその多くがセイヨウタンポポ・ハイニシキソウ・アカバナユウゲショウ・ワルナスビ (これは北アメリカ原産の多年草。ナス科で白い花は可憐ですが、葉にも茎にも硬い棘があり、始末に困る害草) 等外来種で占められています。

目新しいものはまだ確認できず、清瀬に自生しているものがほとんどです。秋のうち一面に芽生えたカラスノエンドウ(マメ科のつる草)の中に、セイヨウタンポポ・ハルジオンなどがこの寒さに耐えロゼット状に葉を広げ、春を待っています。



セイヨウタンポポのロゼットと花



オニノゲシ



マツヨイグサ

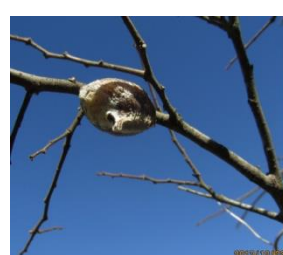
葉を落としたエノキ・クヌギの幹には、オオカマキリ・ハラビロカマキリの卵塊があちこちに見られ、沢山の命が生まれ出る春も間近です。



オオカマキリの卵塊



ハラビロカマキリの卵塊



アサギマダラ (マダラチョウ科)

宮澤 とよ美

清瀬市でまだ確認されていない虫や植物に出会った時、大変心ときめきを感じます。温暖化の影響や人によって放蝶され、今は市内で繁殖をしている、ツマグロヒョウモン・アカボシゴマダラ (タテハチョウ科) 等と始めて出合った時も驚きましたが、あらかじめ情報があり、いつかは見られるのではという思いで出会うのと、思いがけなく出会ってしまうのでは驚きが違います。

10月23日のお昼、外出からの帰宅途中Yさん宅のフジバカマの花に止る大きな蝶に引き付けられました。急いでカメラを取りに帰り、よく見るとアサギマダラです。平地のこんな住宅地で見られるなんて夢のまた夢。でもあり得るんですね。

アサギマダラは、垣根のところから写されていることは判っているのでしょうか、動じる風もなく吸蜜を続けています。

郷土博物館館長森田先生から、「たぶん南への渡りの途中かも知れませんが、ヨツバヒヨドリなどの花が好きですね」と教えて頂き、フジバカマに止まっていた事に納得いたしました。そう言われれば、アサギマダラは渡りをする唯一の蝶として、その生態が何度かTVで紹介され、どなたもご覧になられたことと思います。

図鑑によると、アサギマダラは、春から夏にかけて本州等の標高1000mから2000



フジバカマを吸蜜するアサギマダラ

mほどの涼しい高原地帯を繁殖地とし、近場では、高尾山や甲州・信州の山を訪ねるとよく見られます。そして秋、気温の低下と共に適温の生活地を求めて南方へ移動を開始し、遠く九州や沖縄、さらに八重山諸島や台湾にまで海を越えて1000Kmを超える大移動を……とあります。その途中に幸運にも清瀬で小休止のアサギマダラに出会えたのでしよう。

また逆に冬の間は、暖かい南の洞窟で過ごし、新たに繁殖した世代の蝶が春から初夏にかけて南から北上し、本州などの高原地帯に戻るという生活のサイクルです。この蝶は、胸部の黒いところに白い斑点が印象的で、とても美しい蝶です。幼虫の食草となるガガイモ科植物は、どれも毒性の強いアルカロイドを含み、このアルカロイドを取りこむことで毒化し、敵から身を守っているとされています。成虫の鮮やかな体色は、毒を持っていることを敵に知らせる警戒色と考えられているそうですが、いつか又清瀬で会えたらいいなと思います。

清瀬の水事情物語(3)

小西 一午

ここで長閑だったかつての清瀬の田園風景をふりかえってみよう。今の台田団地一帯は昔は最も広い田圃だった。柳瀬川の金山堰の水門をくぐってくる等の水は、田用水や水車用水の小川となって台田一帯に注がれていた。その浅瀬ではメダカが泳ぎタニシやシジミもとれ又フナ・ナマズ・ドジョウなども捕まえられていて、稲の作付の時以外の田圃は子ども達の格好の遊び場だった。春ともなると空高くさえずるヒバリの鳴き声を耳にしながらレンゲ畑をながめながら自由に飛び回る子ども達が元気にすごすユートピアだった。それに水車用水べりに散見される水車小屋の風景と相俟ってそれは牧歌的な田園の情景をかもしだしていた今は昔の清瀬の叙景だったのである。

さて飲料水や田園水以外に清瀬で水を活用していたのは、水車稼ぎで脱穀・製粉を行っていた人たちである。天保3年(1833年)下宿の初代名主友右衛門・百姓組頭の仁右衛門・茂兵衛らが製粉業をはじめていた。友右衛門二代目のとき当時五穀は幕府の直轄専売だったので、粉といえども五穀に準ずるとして江戸の穀物問屋と多摩一帯の製粉業者が争うという事件があったとき、多摩方の製粉業者の惣代となった友右衛門らの働きで多摩の水車稼ぎ人仲間(組合)がこれに勝訴した教訓から村の枠をこえ近隣の人々と連携することで自分の村も治めることができると確信したのである。又ある時は貧窮に悩む村民に施米をして奉行所から褒賞を受けるなど信望も厚く三代目に引き継がれていたがそれは私学を開いたりしていたが上・中・下の三清戸と下宿・中里・野塩(秋津は東村山に編入)の六ヶ郷が合併してできた清瀬村の初代村長になった高橋友右衛門その人である。

さて水車のその後の消長であるが、友右衛門のそれは間もなく消滅していたが、仁右衛門・重兵衛のものは加藤水車・伊藤水車として昭和初頭まで存続していた。

このように清瀬における水とのかかわりは先人たちから色んな形で引き継がれてきたが、昭和35年(1960年)日本が戦後の混迷から脱却して高度成長期に入ってそれが一変する。すなわちあの理想郷だった柳瀬川沿いの三水田地帯は、清瀬が東京のベッドタウン化して田地のほとんどが宅地になり住宅が建ち人口が急増するとともに病院等のほかのたくさんの事業所が川沿いに立地することにより住民の洗剤の泡等の家庭雑排水や事業所からの産業排水が流れこみ、柳瀬川は一転ドブ川と化し天下に悪名を残す汚濁河川になっていくのである。

これに敢然と立ち向かう川づくりの会をはじめとする市民運動の後押しで、河川当局が動きだし、ユートピアだった柳瀬川の流れを取り戻すまでの話は次号以降で。(続く)

福島復興応援スタディーツアーに参加して

大谷 恒子

「生活協同組合パルシステム東京」主催の“福島復興応援スタディーツアー”第1回目の10月4日（金）～5日（土）及び第2回目の11月15日（金）～16日（土）の2回のツアー（1泊2日）にそれぞれ参加しました。JR特急ひたちで常磐線の上野から湯本まで乗車、湯本駅到着後、パルシステム福島の貸切バスにて、いわき市内にある「パルシステム福島」へ移動。到着後、和田理事長、佐藤理事より、3月11日の被災当時の生々しい体験及び現状報告を聞かせていただきました。その後、おいしいお弁当と福島産りんごをいただきました。昼食後、山菱水産(株)（パルシステムと取引のある被災したメーカー）から、震災と原発事故による被害状況、いわき水産の現状と今後の復旧・復興についての取り組み、流通業界及び消費者に理解していただくための努力等について説明がありました。次いで、センター内に展示の放射能測定器（食品用）を見学、また、(株)ミューテックいわきの担当者から、LEDの蛍光灯や安定機器、防災用無停電電源装置、太陽光発電シートについて説明いただきました。

終了後、コーディネーターのNPO法人腐葉土2100の里見理事長さんのご案内で、広野町、楡葉町、富岡町（原発から10キロ圏内）など居住制限区域の視察を行いました。途中、車内から窓越しに見た田園風景は見渡す限りセイタカアワダチソウとススキの生い茂る原野というか荒野（10月）になっていました。「原発事故さえなければ、今頃は黄金の稲穂がゆれる田園風景が広がっていたのに」と現地の人のお話でした。除染で出た放射能により汚染された土や草等が入れられた黒いフレコンバック（1袋単価25,000円）がその原野に行き場もなく無数に放置されていました。

2回目の11月時は、フレコンバックの大きな塊の上にシートが被されていました。

バスを降りて視察した富岡町（避難指示解除準備区域）では、津波で打ち寄せられた車が家の中に飛び込んだ光景や美容院の玄関先に、地震が発生した時間で止まった時計がぶら下がっていたり、2011年3月11日の大地震で時が止まってしまったような、目を覆わんばかりのゴーストタウン化した町の風景を見て、原発事故の不条理を考えずにはいられません。また、津波被害と火災被害を受けた久ノ浜地区では、小さな仮設浜風商店街で頑張っている地元商店のご婦人方に、こちらがなんだか元気づけられました。できる限りの支援を行うべく、地元のお酒などを買い込み、バスで帰途につきました。宿泊先は常磐湯本町の古滝屋さん。創業350年の老舗旅館で、震災前は200人いた従業員が、震災後は20人になってしまったため、宿泊は素泊まりで、寝具の上げ下ろしはセルフでした。また、夕食の準備も出来ないため、バスで移動、夕食はスパリゾートハワイアンズのレストランで取り、フラダンスショーを鑑賞して宿に戻りました。翌日（2日目）は、同旅館の会議室でNPO法人ザ・ピープルの理事長 吉田恵美子氏より、NPO法人ザ・ピープルの事業概要、震災当時の状況と活動、その後の取り組み等

についての報告がなされました。すばらしいアイデアと実行力にただただ敬服と感動の念を禁じえません。終了後、NPO法人ザ・ピープルのオーガニックコットンの圃場に行き、約1時間の農作業ボランティア（綿つみ、10月時はオリーブの木の畑で雑草取り）をして、お昼は農協でお弁当をいただいた後、NPOいわきオリーブプロジェクトの木田源泰さんより、福島・いわき市の農業の現状とこれからの展望とアイデア等々、お話を聞き、大変力強い決意と抱負を伺い、気持ちが少々明るくなりました。終了後、いわき駅より帰途につきました。

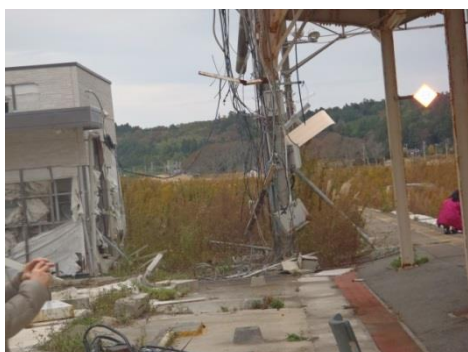
二度にわたる福島復興応援スタディーツアーに参加しましたが、やはり、現地に立って、被災者の人々の話を直に聞いてはじめて見えてくることや学ぶことの多さに気づかされました。原発からの直線距離と放射線量の相関関係があるとは言えないようで、福島市、郡山市は原発から約60キロに位置しているにも関わらず、いわき市の2~5倍の値で推移しています。福島県内で高い傾向にあるのは浪江町、福島市、飯館村、郡山市などの県中、県北、相双地区の一部です。（風などの環境的条件による）原発再稼働容認、推進論者には全員、福島原発被災地に行って、現場の状況をよく見てきて欲しいと思いました。私たち人間は、自身が安全な場所において、直接的に被害にあっていないととかく、喉元過ぎれば・・・になりがちですが、3.11の津波と原発事故（特に原発事故について）のことは、被災者の置かれている身に思いをはせ、自分にできることは何かを問いながら、どんな小さなことでも良いから行動に移して行きたいと思いました。



津波で家の中に飛び込んだ車



地震、津波で縮んだホテル



津波で破壊された JR 富岡駅舎



津波で打ち寄せられた車群

野菜作りは豊かな文化のひとつ

佐々木 あつ子

少し自己紹介...

私は、福岡県飯塚市に生まれ、3歳のときに東京の伯母を頼りに一家で武蔵野市に越してきました。小さいときの思い出は、2つ上の兄と近くの森でよく遊んだことです。夏にはセミを取り、昆虫採集がとても好きでしたので、親にせがみ「昆虫採集セット」を買ってもらったのを覚えています。いま思えば昆虫を捕まえては残酷物語のようなことを平気でしていたように思います。

当時は遊びといっても、ゴムとびや缶けり、だるまさんが転んだなど夕方暗くなるまで兄と近所のお兄さんお姉さんたちと遊び、母に「早く帰ってきなさい」とよく叱られました。母に叱られたのは、まだあります。森でコウモリを捕まえて、ポケットに隠し持って帰り「これうちで飼っていい？」と母に見せたらびっくり仰天して「早く返してきなさい」といわれ、どこに返すのかと迷いましたが、とりあえず自宅の近くで放してやりましたが、翌日みたら死んでいました。とてもいけないことをしたのだと思い、それ以来コウモリ採集も昆虫セットも卒業しました。昭和38年頃の話です。

夫の転職で知ったこと

さて、それから50数年が経ち、今私は世直しの仕事をしていますが、まだまだ時間がかかりそうです。ところで私の主人は、今年で60歳。36年間勤めていたところを定年退職しました。いまは、60歳で退職するのは珍しいケース。年金が支給されるまでは何とか頑張る人のほうが多いのですが、なぜか退職したのです。

本人は、退職ではない「転職」ですと近所のみなみな様にも言っていますが、その決心にも驚きです。余談ですが、主人の実家は福島県の福島市内で酪農家を営み、その傍ら野菜も作っています。本業は、搾乳した生乳を自前のプラントで低温殺菌し牛乳を販売しています。福島原発事故以来、風評被害による消費者離れがまだ尾を引いていますが、少しずつ取り戻しているようです。実家の兄は、今回の原発事故について福島の農産物は「どの地域よりも放射線量の測定をしているのに」と怒りを隠せない様子でした。元の生活に一日も早く戻れることを祈るばかりです。話が少し逸れましたが、主人の転職先は畑作り。固定種の野菜づくりです。この固定種という「種」にこだわり、無農薬、無化学肥料、無肥料でやることだそうです。この「固定種」を知っている方はどの位いらっしゃるのでしょうか。実は私も種なんてどれも同じ、品種こそ多いだろうけどくらいでこだわりもありませんでした。しかし、話を聞くとこだわりの理由がわかったのです。

固定種とF1？って

野菜は、固定種でできた野菜に比べF1（エフワン）の野菜がほとんどだそうです。種と技術のちがいを言っているのですが、固定種がわからない人でも「手種」という言葉は知っているのではないのでしょうか。主に京都の山間部で自家採取の種のことをいう

そうですが、米作りは代々男が、そして、野菜作りは嫁の仕事でした。手種は、母から娘へ故郷の味を忘れないように嫁入り道具として持たせたものだったそうです。こうして、各地で代々守り継がれてきた昔野菜の種は姿を消し、手種を採っている農家はほとんどなく、山間部の村で自給用にひっそりと受け継がれているのが実態だそうです。固定種の種を手に入れるには、大変なようです。種屋さんに買いに行っても固定種はマイノリティだそうです。

一方、一代交配種のF1は、異なる親を交配させていいとこ取りしたものだそうです。両親に比べてより生育が旺盛で、抵抗力が強く、収量も高いそうです。これを「雑種強勢」と呼ぶそうですが、しかし、雑種強勢は一代かぎりです。F1から種を採るとばらつきが出てしまうそうです。ですから、F1の種は毎年購入する必要がありますが、それでもF1の種は揃いがよく、収量が高いので、手種を採るよりも買った方がずっと効率がよいのがメリットのようです。F1は、日本の農業を大きく前進させた技術でもあるようですが、一方でF1技術の普及は、非効率でお金にならない在来野菜を駆逐してしまっただけです。

野菜作りは豊かな文化

いま、固定種の野菜作りは、全国一律のものはない、その地のストーリー、味が売りとなり、ご当地野菜の魅力をもう一度見直そうという動きが全国で起きているそうです。昔は、今のように簡単に種を買うことができませんでしたから、栽培される野菜の種類も少なく、ひとつの村では、みんなが同じ品種の野菜を作っていました。長い年月を経て、その地になじんだ特徴のある在来野菜が生まれ、多様なご当地野菜ならではのお料理があったり、保存食があったり、豊かな文化の一部となっていたようです。ここに挑戦だそうです。

というわけで、我が家は多品種の野菜で花盛りの状態です。自家採取のかぼちゃを買って来ては種を採り、保存へ。きゅうりも普通のものではありません。一度聞いた位では覚えられない名前のものであります。それに在来種ものは地方に行かなければ手にはいきませんが、固定種の野菜づくりにこだわりをもって、只今奮闘中というところです。畑の確保もやっとここで、埼玉県ときがわ町で2反(600坪)ほどの畑を借りて挑戦できることになりました。みなさん、見守ってください。



我が家の畑

今年もどうぞよろしくお願いたします。

自然エネルギー&市民電力 ドイツ・デンマーク視察(デンマーク編)

小西 美香

2月3日から10日にかけて参加した、生活クラブ生協首都圏4単協主催のスタディーツアー、ドイツを後にし、デンマークに向かいました。

デンマークは、半島と島からなる国ですが、半島にあるデンマーク最大の都市コペンハーゲンを離れると、ほどなく畑と牧草地帯の農村が続きます。マイナス10度を下回る寒さで、さすがに牛の姿は見えませんでした。都心を離れるほど風車が増えていきます。そのデンマークの小さな島、人口4000人のサムソ島は、100%自然エネルギーによってエネルギー需要を賄う地域として世界的に知られています。1985年に原発の導入を廃止したデンマークは、風力発電を中心とした代替エネルギーへの移行を早くから模索してきました。1997年、政府は島における自然エネルギー導入計画を公募し、それに参加したサムソ島は、エネルギー100%自給を目指すモデル地域として取り組みを始め、10年かけてそれを実現させました。さらに、2030年までにフェリーや自動車・農業機械も含め化石燃料ゼロを目指しています。

デンマークでは日本の消費税に相当する付加価値税が25%とかなり高いため、消費にあたっては常に本当に必要かどうかを考えることが現地の人々の習慣になっているようです。エネルギーについてもその例外ではなく、自然エネルギーによる創出とともにエネルギー全体の節減と効率化を図っています。

以下、サムソ島での取り組みを紹介します。

<省エネ>

条例で家を新築する際は低エネルギーハウスとすることとなっている

- ・蓄熱効果を利用した壁
- ・すべて有機資材を使用
- ・雨水利用（水は船で運んでくるため貴重）
- ・100㎡のソーラーパネル、100㎡の温水パネル 等

<自然エネルギー発電>

陸上風力発電

・島内で1000kWの風力発電が11基稼働（総発電量は2500万kWh/年）し、これだけで島内の全電力需要が賄われている。

太陽光発電

・売電収入の50%が税金となるため、売電するより自家消費したほうが効率的で、あまり大きく設備投資しても採算が取れない。

洋上風力発電

- ・サムソ島の南部沖合 3.5km、水深 20mの海域に 2300kW の風車が 10 基稼働し、7500 万 kWh/年の電力を供給（風車組合所有 2 基、会社共同所有 3 基、自治体所有 5 基）
- ・これは島内の運輸交通部門における需要エネルギー量の 115%に匹敵する。（発電された電力は海底ケーブルで島外へ売電される）



<エネルギー利用の効率化：地域熱供給プラント>

サムソ島内の 4ヶ所で地域熱供給を実施し、熱需要の約 75%を賄っている。

藁ボイラーによる地域熱供給プラント

- ・約 260 世帯（＝オーナー）へ温熱を供給（温熱は 90℃で供給）
- ・藁は農家より購入され、農家にとってもメリットとなっている。
- ・藁は 600kg のブロックで冬は 17～20 個/日（夏は 7～8 個/日）使われるが、自動運転のため作業員は冬 1 日 2 回、夏は 1 回の作業・点検のみで、灯油に比べコストは 1/6 程度で済む。
- ・熱効率は 20～30%程度のロスが出るが、燃焼灰はリン・ミネラルを含み畑へ入れることで、肥料の 10～15%を削減する事ができる。

木質チップ+太陽熱パネルによる地域熱供給プラント

- ・220 世帯（＝オーナー）へ温熱を供給
- ・木質チップは島内の雑木林の手入れの際に伐採した枝を加工
- ・夏は太陽熱パネル（250 枚）だけで間に合っている。



サムソ島の地域熱供給プラント（木質チップ+太陽熱パネル）
太陽熱パネルをおおってしまう草をやぎに食べさせている

川と温泉 ⑤ (みはらしの湯)

木村芳信

日本には、川（海）の近くに温泉が数多くある。その中でも露天風呂が好きで有る。今回は、東京より南方 287 km 離れた八丈島の温泉を紹介します。島の大きさは山手線の内側位の大きさであります。大きな島なので当然川もあります。温暖な気候です。しかし低気圧が近づくと傘は役に立ちません。なぜ？（雨は横から降る？）台風並みである。温泉も豊富で7カ所あります。島には仕事の関係で通算2年位お世話になりました。



八 丈 島

夕方の最終便が飛んでしまうと、翌朝の便が飛んでくるまで孤島になります。あとは宿で飲むか、温泉に行ってから飲むかぐらいしかありません。（飲兵衛にはいい島です）魚は太平洋の荒波にもまれて身が引き締まっておいしいです（島アジ、タコ等）。島寿司、明日葉うどん、クサヤ等美味しいものが沢山あります。意外に知られていないのが八丈島は日帰りができることです。朝7時30分羽田を飛び立ち8時25分には着きます。帰りは5時30分の便で羽田には6時25分には帰ってこられます。（お金が係るけど）

八丈島は、流人の島としても有名です。八丈島の公式な流人第一号は、慶長5年関ヶ原の戦いに西軍石田三成方に属した宇喜多秀家である。最後の流人は北方探検で知られる旗本近藤重蔵の嫡男、近藤富蔵である。1826年（文政9年）に殺人を犯して八丈島に遠島となり50年以上もの間、島で流人としての日々を送った。1880年（明治13年）に明治政府により赦免されるまで。



みはらしの湯（露天風呂）

みはらしの湯が好きなのは、島の先端の高台にあり眺めが絶景な点です。**温泉に浸かりながら満天の星空を眺め又島の沖合を航行する船の光だけがかもす光景は絶品です。**太平洋の雄大さが感じられる温泉です。元気な内にもう一度訪ねたい温泉です。

2013年度 活動記録 (9月～12月)

- 9月5日 (木) 第5回幹事会 (環境・川まつり反省、会誌21号収録、空堀川清掃他)
*宮澤、田島、戸塚、加瀬、田中、丸山、金内、木村、大谷 (2)
- 9月8日 (日) 多摩検定関係者を“柳瀬川回廊”に案内*宮澤
- 9月13日 (金) 三角地帯・植栽地手入れ作業*木村、加瀬、田島、大谷 (恒)、宮澤、
- 9月17日 (火) 植栽地の除草作業*酒井市民
- 9月19日 (木) 編集会議 (活動センター)*金内、丸山、木村、加瀬、宮澤、大谷 (2)
- 9月21日 (土) プラネタリウム見学会 (多摩六都科学館)*木村、田中、加瀬、
宮澤、大谷 (2)
- 9月24日～26日 空堀川 (薬師橋～三郷橋) セイバンモロコシ除草作業*宮澤
- 9月27日 (金) 柳瀬川・投網了承文書貼り付け及び水汲み*木村、丸山、大谷
- 9月28日 (土) ～29日 (日) 「市民活動発表と展示」 (市民活動センター)
*矢島、増田、渋谷、戸塚、加瀬、木村、丸山、宮澤、大谷 (2)
- 9月29日 (日) 「石田波郷 (俳人) 石碑・除幕式」 (松山中央公園)*田中、大谷 (恒)
宮澤
- 10月1日 (火) 編集会議 (活動センター)*金内、木村、戸塚、田島、丸山、宮澤、
大谷 (2)
- 10月3日 (木) 会誌21号印刷・製本、□第6回幹事会 (植栽地草刈手順、空堀川
清掃他)*戸塚、田島、田中、加瀬、宮澤、木村、丸山、金内、大谷 (2)
- 10月4日 (金) 放射能測定立ち合い (柳瀬川運動公園、旭ヶ丘団地)*宮澤
- 10月10日 (木) 空堀川マーキング*北北建・係長、業者 (2)、宮澤、大谷 (恒)
- 10月13日 (日) ◆植栽地の維持管理作業*酒井、渡辺、松崎・小平・与儀 (丸松産)
菅原 (裕)、小西 (美)、宮原・渡部はるか (3歳)、大江、戸塚、
木村、金内、加瀬、宮澤、大谷 (2)
- 10月20日 (日) 市民まつり・みどりの基金募金活動*田中
- 10月25日 (金) 環境・川まつり実行委員会*宮澤
- 10月27日 (日) ◆空堀川の清掃 (梅坂橋・親水階段前)*畑山、須藤 (梅園)、木股、
酒井、松岡、関口、須藤、菅原、小西 (美)、戸塚、木村、加瀬、宮
澤、大谷 (2)
- 10月29日 (火) ふれあいまつり実行委員会*宮澤
- 10月30日 (水) 環境学習・空堀川 (四小の2年生4人)*宮澤、大谷 (恒)
- 10月31日 (木) 環境学習・ビオトープ (清明小の4年生)*望月、田中、大谷 (恒)、
宮澤、◇同日: 胴長靴の修理 (活動センター)*加瀬、金内、大谷 (2)
- 11月6日 (水) 空堀川・柳瀬川流域連絡会*加瀬、宮澤

- 11月7日(木) 第7回幹事会(ふれあいまつり、一斉清掃、助成基金、会誌22号他)
*戸塚、加瀬、田中、木村、丸山、宮澤、大谷(2)
- 11月8日(金) ◇ふれあいまつり準備(コミュニティープラザ)*木村、大谷、加瀬、
宮澤、◇投網了解表示の貼り付け:大谷(郁)
- 11月9日(土) ふれあいまつり(コミュニティープラザ)*木村、金内、大谷(恒)
戸塚、田中、丸山、矢島、増田、加瀬、吉田
- 11月10日(日) 市内一斉清掃*渡辺課長、山下係長(市役所)小室、吉田(釣り人)
沼田、菅原印刷(4人)酒井、丸山、木村、金内、大江、小西、加瀬、
大谷(恒)、宮澤、
- 11月14日(木) 新河岸川流域連絡会(北朝霞)*加瀬、宮澤
- 11月22日(金) 環境・川まつり実行委員会*宮澤
- 11月23日(土) くぬぎ山・コンサート(所沢)*木村、加瀬、大谷(恒)、宮澤
- 11月30日(土) 新河岸川流域川づくり懇談会(朝霞リサイクルプラザ)*大谷(恒)
- 12月1日(日) みず・みどり・下水道(国分寺市)*宮澤
- 12月4日(水) 空堀川・柳瀬川流域連絡会*加瀬、宮澤
- 12月5日(木) 第8回幹事会(会誌22号原稿、吉村伸一、島谷幸宏講演、新年会、
助成金ほか)*宮澤ほか7名
- 12月7日(土) 午前:新年会印刷・配布作業*加瀬、金内、宮澤、大谷(2)
- 12月7日(土) 活動センター・安藤雄太氏講座(コミュニティープラザひまわり
*戸塚、宮澤、金内、加瀬、大谷(2)、
- 12月12日(木) (夕方)新河岸川流域市民懇談会(けやきホール)戸塚、加瀬、田中
(夕方)柳瀬川合流点説明会・北北建(中里地域市民センター
*木村、宮澤、大谷(恒)、
- 12月13日(金) 空堀川・柳瀬川合流点工事への対策打ち合わせ*加瀬、田中、宮澤
- 12月14日(土) 社会福祉協議会・歳末助け合い募金活動(秋津駅、清瀬駅)
*大谷(恒)、宮澤、加瀬
- 12月17日(火) 空堀川・柳瀬川合流点工事、改善点について清瀬市との打ち合わせ
*渡辺課長、田村課長、渋谷市議、木村、金内、正木、戸塚、田中、
加瀬、丸山、宮澤
- 12月18日(水) 新合流点工事について打ち合わせ*渡辺課長、宮澤
- 12月24日(火) 午前:環境・川まつり実行委員会*宮澤
午後:新合流点改善申し入れ*渡辺課長、正木、田中、加瀬、宮澤
- 12月25日(水) 多摩六都科学館「夏休み行事結果報告」(多摩六都科学館)*木村、
宮澤、田中、加瀬
- 12月27日(金) 新合流点について(中澤副市長との懇談)*渡辺課長、宮澤、木村
田中、

◇◇ 事務局だより ◇◇

■「三郷橋・植栽地の維持管理作業」

本年度2回目の植栽地の維持管理作業が10月13日（日）に行われました。当日は丸松産業様の関係者を含む会員17名の参加のもと草刈作業が行われました。終了後、芋煮会を行い、楽しいひとときを過ごしました。ありがとうございました。

■「市内一斉清掃への参加」

今年度2回目の市内一斉清掃が11月10日（日）に行われました。当会としては、柳瀬川の川中及び遊歩道を受け持つことになっており、今回も下宿地域市民センター前に集合し、柳瀬川の川中及び遊歩道（城前橋～金山橋間）の二手に分かれ、ゴミ回収作業が行われました。当日は、渡辺環境課長、山下係長のもと、菅原印刷の関係者、清瀬市民を含む16名が参加し、川まつり会場となった川の杭のゴミの撤去作業が行われました。ありがとうございました。

■行事予定のお知らせ

(1) 第9回川でつながる発表会開催

「主催：新河岸側流域川づくり連絡会」

○日 時 2月9日（日）10:30～1:00

○会 場 川越市立千波小学校・体育館（川越市富士見町4-1）
◇東武東上線「川越駅」下車徒歩約8分

○参加費 無料

*問合せ先 ☎：049（224）6041 川越市役所建設部河川課

◇午前：現地見学会 *千波河川周辺の見学会（参加申し込み必要）

◇午後：発表会・交流会（参加申し込み不要）

(2) 空堀川の清掃作業

○日 時 3月9日（日）9:30～11:00「雨天中止」

○場 所 空堀川・梅坂橋（親水階段前）

*3月1日号の市報に掲載予定

■訃報■

田中長夫様におかれましては、昨年6月10日ご逝去されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。



現在の柳瀬川・空堀川合流点（くるまや橋より撮影）

■編集後記

昨年は温かいご支援とご協力に心より御礼申し上げます。

2014年新年号（第22号）が発行されました。本号も皆様からの寄稿によりまして内容豊かに作成できました。本当にありがとうございました。

その中でも、柳瀬川・空堀川合流点工事の記事は、川づくり・清瀬の会が長年わたり取り組んできた最重要問題です。どうぞお読みいただきまして、積極的なご意見、論評をお願いいたします。

次号の発行は平成26年5月（予定）です。「全員参加の会誌」川づくり・清瀬の会（23号）に皆様のご投稿をお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。



川づくり・清瀬の会 事務局 大谷方
〒204-0004 東京都清瀬市野塩 1-156-5 401
電話番号 042-495-9052 e-mail i-otani@live.jp
ホームページ <http://kawadukurikiyose.web.fc2.com/>